健全育成シリーズ（96）
情報社会に生きる子どもたち

情報社会と子どものかかわり

最近暗いニュースの多いなか、二十一世紀に向けますます活気があり期待されるのが情報通信分野である。

今や、子どもは朝から夜中まで、テレビのチャンネルをひねり、自分の好きな番組をみることができる。そのチャンネルもVHS・BS・CS、更にはインターネットや興味をそそるような雑誌などと、膨大な量の情報が手に入る時代となった。

自分の部屋を与えられ、自分だけが独占できるテレビやパソコンを持ち、その使い方が子どもの意志に任されている家庭も少なくない。

子どもがマスコミから受ける影響は、教師や親よりはるかに強くて大きい。

ある雑誌の中で、放送関係の人が次のようなことを言っておられた。――今の子どもたちは、生まれたときからメディアの中で育ってきている。今後もますます情報量の多い時代を生きていかなければならないということは、これからの教育はそういう多量の情報とどうかかわっていくのかということが課題である。

洪水のごとくに発信されるメディアに対して、何が良くて何が悪いのか、メディアに青少年が振り回されないようにするために、批判精神と選択能力を育てていかないといけない――。

子どもの判断が大きなウエイト

有島武郎の「生まれいずる悩み」という小説の中で、漁師をしながら画家を目指す青年が「漁夫たるべきか、画家たるべきか」悩みを相談する場面がある。この相談を受けた「私」は「漁夫たるべきか、画家たるべきかは君自身が決めることだ。ただ神のみが知る」と最後まで答えを出さず、本人に決定させようとしている。

この場面には自分の将来を決めるために苦しみながら選ぶという過程を通して、人の成長する姿が描かれている。

人間という動物の特徴は「選びながら発達する」と言われている。人間の成長は遺伝、環境も影響する。しかし、その子どもが「どういう選び方をして生きているか」ということが重要なことである。

子どもは自分自身で判断し意識し分別して生きていく。その子どもの選び方を励まし育てるのが親や教師の役目である。

言い換えれば、「選び方」を育てるのが教育であると言える。

テレビ報道も、人が介在して選択された情報であることを受けとる側が認識しなければならない。そのことを子どもたちに気づかせる機会を持つためには、もっと家族で話し合うことも必要であろう。

親は誰も、子どもが「なぜなぜ坊や」と呼ばれる幼児期に、次から次へと、うるさいほど質問責めにあった経験があると思う。

その人格を形成する幼児期に、疑問を大きく膨らませてやったか、萎ませてしまったかは、その時の答え方や回りの人の対応の仕方にあると言っても過言ではない。

「子どもの疑問を育ててやること」の訓練を積むことが、メディアに対しても単に受け身でなく、ある時は、映像や言葉を批判的に眺められ、自ら取捨選択できる子どもを育てることにつながる。

また、メディア教育を通して「自ら考え、自ら選ぶ」ことを学ばせ、他を認めながら個性的に生きる子どもたちを育てるには、その判断する能力を鍛えてやることも重要になってくる。

そのための一つには、普段の生活の中において、すぐに親が答えを出してしまわないで、「問い」と「答え」の間を大きく取ることであろう。

伝言板

大月保健所

大月市大月町花咲1608―3
☎（22）7824

薬物乱用は「ダメ、ゼッタイ」

覚せい剤など薬物乱用者数は依然として高い水準で推移しており、しかも一般市民層、主婦層への浸透が進む一方、最近では高校生などを含め低年令化する傾向があります。

乱用による弊害は、個人の健康を蝕むだけでなく、その家族や周囲の人達の生活を破壊し、乱用による幻覚などで凶悪な二次犯罪をひきおこすなど、社会や家庭に計り知れない悲劇をもたらします。

薬物の乱用防止には、一人ひとりが乱用の恐ろしさを正しく理解し、学校、家庭、地域が一体となって取り組んでいくことが大切です。

「一回でも」薬物乱用を許さない「ダメ、ゼッタイ」の地域社会をめざし、626ヤング街頭キャンペーンが次のとおり開催されますので多数の方々の参加をお願いします。

実施日　6月26日

場　所　談合坂サービスエリア（午前9時～11時）
オーツルホームセンター（午後1時～3時）

結核の現状について

結核は、昭和二十五年までは、死亡率の第一位を占めていましたが、それ以降発生は減少していません。しかし、今現在も撲滅はしていません。衛生状態が良い状態で病原菌に対する抵抗力が低くなった若者や、年を取って免疫力が下がった老人が多くかかっているのが現状です。

また、咳や痰が続いても、結核への関心が低いため、風邪だと思い込み、重症になってから発見される場合も多く、また、その間に人に移すこともあります。

現在では結核は治る病気です。早期に発見し治療することが、回りの人たちに感染させない最良の方法です。

そのためには、職場の検診もしくは住民検診を定期的に受けること、咳・痰が続いたら風邪だと自己診断することなく医師の診察を受けることが大切です。

また、他県においては、院内感染の問題が取り上げられています。

結核研究所がホームページを開いています。結核に関する知識や情報を必要とする人は大いに利用してください。

アドレス　http://www.jata.or.jp/